

ほんとは、いつも見せたくない、と
思っているのですが、
「見せてしまって、どうしたらいいものやら、と困惑を
しながら、
その居心地の悪いところ、に
いるわけです。」

spoというのは「居心地の悪いところ」
なのです。

それは、点の集中であり、線の集中であり、
100人の人に指を刺されたら
お尻のあたりがむずむずしませんか。

視線も、。

相手のことを、じっと見ていることは
可能ですが

いざ
顔を突きあわせてみると
居心地が悪い。

真ん中に、旗を立てたのはいいのですが
あたしがずっといられるかといえは
そんなことは
なく。

ええ、あなたももちろんそうでしょう。

逃げ出しなさい。
え？
落ちるのですか。

いえ、あたしはどんなに足を引っ張られても

落ちません。

がさがさした
汲み取り便所にあつた
ざら紙のようだ

印刷の文字が、あっちこっちに、

そうじゃない。

そういうことじゃない。

さて、いつまでそれは否定され続けるのか。

たくさんの放物線が
そこに集中して
焼けこげを作ったようなので

居心地の悪い
その
場
に

わたしは首根っこをひっかけられて
コートのように
ぶらさがって、います。

見ましたか。

私は以前からKAMATAの写真を見ていたが、京都での展示の時に初めてその写真の持つ呼吸というのを知ったような気がした。

そのインスタレーション的要素の間に見え隠れする本当の姿というもの、私にははっきりと見えた。

そうじゃない、そういうことじゃない。
いつまで否定され続けるのか。

しまりのない口の隙間と、半開きの眼の切り口。鼻から余計な汁も出てる。私の後頭部の辺りにずっとある光景。

「意味のないことを言って、空から落ちたい。」私はある頃の中で、自然とそう呟いた。ほんと無意味にさりげなくです。

私は今、空の途中で呼吸をしているが、夢のような空間でこれが上昇しているのか、下降しているのかさえわからない。

動いているのか、止まっているのか、生きているのか、死んでいるのか。

私が私である時は一瞬だと思った。と同時に他に他であるのも一瞬だと思った。

私がいる場所や、身体が動いていることが、そういった当たり前の事実が、ある瞬間、いかにもそれらしく作られていることに気付く。

「生きている」このカタダは、いかにもそれらしくできている。そういう事実が目に見えた。

KAMATAの写真は、誰かの記憶のようであり、実際存在する特定の場所のようでもある。

がしかし、どこにでもあるような、どこにもないような、そういういかにもそれらしい空間がそこにある。

嘘のような本当のような、そんな無意味に不安を抱きつつも、何故か安らぎの方が強い。

写真の持つ冷やかな表現性は、そういった歪みの輪郭線をよりくっきりと際立たせる。

こんになら、みなさま。
さようなら みなさま。

旗を振って下さい。
旗を振ってみてください。

その時に初めてその光景に絵を添えたらどうなるだろうと思いついた。

それから話は違ひ、今回の「存在と記憶」展をすることになった。

写真と絵画の持つ表現性の違いや質感の差など、それがどうやって反発しあい、共鳴しあうか、そういったただ私が体験したことのない興味も強かったが、
そういった表現としての試み以前に、ある「SPOT」をそこに感じていた。

目に見えるもの以外にある、異空間のような場所に立っている方向感覚みたいなものが、その写真にはある。

それは、円と円が重なったその部分のようで、時間性も、存在性も薄い。その言いようのない「SPOT」をその光景の奥に感じたのである。

私はそれが自分の絵の中にもあることを知っていた。

そういった「SPOT」が至極近距離にある時、どういった空気の流れになるのだろうか。

話し合いの中で、意味が無く形在る物の象徴としての「穴」という明確なイメージが現れた。

形のない形を共有することの矛盾の中に、何かコラボレーション性が成り立つのではないかという実験的なかもしれない。

なんだかどうとも掘みよのない話になってるかもしれないが、それが今回の展示の最大の要である。

コラボレートにも色々あるけれど、今回の一つは一つの作品を二人で作り上げていくわけではない。

物理的に目に見える形でコラボレートしようというのは、最初から頭になかった。

表現の前に必ず動機があって、最初に動機ありきで進む。

両者が感じた「SPOT」という動機をより強く、より曖昧に、その空間を作り上げるにはどうすればいいのだろうか。

私とKAMATAは、大阪と東京という離れた場所で一つのキーワードを頼りに、個々に制作を進めてきた。

それが今日この会場で、同じ空間に置かれて初めてその「SPOT」が出来上がっていくのである。

この文章を書いている現時点ではその様子をまだ想像もできない。しかし、何故か心躍る。無意味に踊ります。さらさら

わかりました、それがあなたの旗ですね。

ありがとう。

居心地の悪い

わたしが

網に

ひっかかって

死んでいます。

認定してください。

それでは、

Kamata motoko

最後に、今日のご来場ほんとにありがとう。私はとっても嬉しい。私の望むところはこれら制作者の意図を越えて、
あなたの後頭部辺りの方向感覚が「SPOT」に重なり、よりその領域が広がることです。